

# 「わがこと・ひとごと」の観点からの中級文法教材作成への一試案

フォード丹羽順子

## 要 旨

日本語の初級教科書が多数開発されてきた現在、次の段階として、多様な中級教科書の開発が望まれている。中級段階では、学習目的もより細分化されてくるので、異なる目的に応える、様々な教材が必要である。ところが、文法の学習を目的とした場合、中級段階での文法を整理する教材としては、現在のところ、筑波大学の『日本語表現文型』、大阪外国語大学の Intermediate Japanese 以外にはないようである。

『日本語表現文型』は、初級課程の文法項目が「表現意図」という別の観点からまとめられた教科書であり、筆者はこれを使用して中級の文法授業を行ってきたが、その過程で、「表現意図」とは別の観点から文法項目を整理するの必要を感じた。話し手が自らのことについて述べるか、他人のことについて述べるか、という「わがこと・ひとごと」(渡辺 1991)の観点である。

本稿は、この観点からの中級文法教材のあり方を探り、今後教科書として発展するための問題点と課題について考える。

【キーワード】 中級文法教材 わがこと ひとごと 「私」 表現意図

## A Proposal for an Alternative Perspective for Teaching Intermediate Grammar: from the viewpoint of "wagakoto (self)" and "hitogoto (others)"

Ford-Niwa, Junko

Now that Japanese textbooks for beginners have been enriched both in quality and quantity, textbooks for intermediate level are necessary. Since the purposes of study become more varied at the intermediate level, materials which serve these purposes are needed.

As a textbook for grammar, "Nihongo Hyoogen Bunkei", which organizes grammatical items according to function, is well known. The author has used this textbook for intermediate grammar class, and has come to realize the necessity of another perspective in order to teach Japanese grammar at intermediate level, which is "wagakoto"(self) and "hitogoto"(others). These terms were first introduced by Watanabe(1991).

This paper discusses the possibility of creating materials for teaching intermediate grammar from this viewpoint, and considers some problems.

## 1. 研究の動機

近年、日本語教育において、初級の教材が多数開発されてきたのに対し、中級教材はまだこれからといったところで、それぞれの機関において様々な工夫がなされている。教科書に目を向けた場合、初級の教科書が、どちらかと言うと、言語の4技能を総合的に養成することを目指しているのに対し、中級<sup>(1)</sup>では4技能に個別に焦点を当てて、その養成をはかる場合が増えてくる。たとえば、読解や会話用の教材については、様々な教科書が開発されてきている。また、それぞれの機関が、新聞やテレビなどからの生のものを、そのまま使用したり少し手を加えたりして、教材化を行っている。

一方、言語技能を支える文法は、どのように教えられているのであろうか。初級の場合と同様に、既成の教科書(後で見るが、内容的シラバスによるものが多い)を利用して、総合的に教えられることが多いのではなかろうか。技能のクラスの中で、それぞれの技能を伸ばすのに必要な文法を教えるという方法もあるが、体系的および包括性に欠けるといふ難点がある。中級段階の日本語能力を養成するためには、文法を何らかの体系に基づいて教えていくことが大切だと考える。

しかし、文法を何らかの体系に基づいて教えるための教科書、すなわち、4技能を個別に教えるとしても、それと並行して「文法を整理する」ための教科書という、現在のところ、筑波大学の『日本語表現文型』(以後『表現文型』と略す)、大阪外国語大学の Intermediate Japanese 以外にはないようである。前者は、初級課程の文法項目が「表現意図」という別の観点からまとめられた教科書であり、後者は、文の種類および文法カテゴリーによってまとめられたものである。

筑波大学留学生センターの補講コースには、技能別のクラスと並行して、「文型・文法」のクラスがあり、そこでは「表現文型」をはじめ、既成の教科書を使用していたが、より良い教科書はないかと常に探していた。

筆者は、1989年秋期コースから『表現文型』を使用した文法のクラスを担当してきた<sup>(2)</sup>。当初はこの教科書の中味をほとんどすべて教えていたのであるが、クラスの制度上の変革にも伴って、教科書の存在はだんだん小さくなっていった。そして、教科書を部分的に利用して「文法」を教えるというように変わっていった。その過程で、中級レベルの文法を教える際には、「表現意図」によって整理されたこの教科書とは異なる、別の観点が必要ではないかと考えるようになった。

筆者が、日本語教育を専門にし始めた頃、故寺村秀夫氏の講義の中で、「父は死ぬと思う」という文で、「誰が思うのか」と質問をして、「父」と答えるか「私」と答えるかで、日本語学習者を大雑把に振り分けることができる、10秒テストになる、という話があった。この話は、その後も筆者の頭の中に残っており、教師になってからは、文法を教える際に、述語の主体が「私(話し手)」か「他の人」かという対立に、学習者の注意を向けさせるよう腐心してきた。このことは、すなわち、話し手が自分自身のことについて述べるのか、他人のことについて述べるのかという、文の述べ方の根幹に関わる問題であり、体系的に学習されるべき点である。

渡辺(1991)はこの対立について、前者を「わがこと」性、後者を「ひとごと」性と呼び、日本語の文法論にこの原理を持ち込んで、文法の諸現象を説明している。筆者は、1994年春期コース文型・文法

Ⅱにおいて、この渡辺氏の「わがこと・ひとごと」を主軸とした中級文法教材を作成し、週1コマ実施した。本稿は、「表現意図」に「わがこと・ひとごと」の視点を加えて教材の一部を作成した過程、この教材の問題点と今後の課題を述べることにより、中級の文法教材の1つのあり方について考察することを目的とする。

## 2. 中級教材の先行研究

### 2. 1 中級教科書

先行研究として、現在ある中級教科書には、どのようなものがあるかをまず概観し、「わがこと・ひとごと」を軸とした教材の位置づけを確認することにする。

野田(1986)は、中級教科書を文型に対する考え方に従って、4つのタイプに分類している。

なお、野田氏は「文型」について定義をしていないが、「[文法項目]を文中において示した類型(パターン)であり、文生成の骨組みとなるもの」とでも言えよう。従って、「文型」は「表現」とは異なる。

#### I. あなたまかせ派

読解用の本文があるだけで、文型を取り出したり、その練習をつけたりしていない教科書。たとえば早稲田大学の『外国学生用日本語教科書中級』がある。

#### II. いきあたりばったり派

読解および会話用の本文があり、その本文に出てきた文型を取り上げ、用例を示したり、練習をつけたりしている教科書。文型の提出にあたって体系だったものがあるわけではなく、たまたま本文に出てきたものを拾っている。たとえばアメリカ・カナダ十一大学連合日本研究センターの *Integrated Spoken Japanese* がある。

#### III. 初級なぞり派

文型を中心に積み上げていく、初級教科書と同様の構成になっている。たとえば大阪外国語大学の *Intermediate Japanese* がある。

#### IV. くみなおし派

初級教科書の文型の分け方や提出順とは全く別の視点で、文型をくみなおした文型中心の教科書。『表現文型』がある。

その後、新しい中級教科書が何冊か出版されているが(2.2で掲げる)、文型に対する考え方によって分類すると、すべてⅡの「いきあたりばったり派」に属するものである。

### 2. 2 シラバス

次に、視点を変えて、これらの中級教科書を、シラバスの観点からながめ直してみよう。

シラバスとは、「あるコースで学習者に教えるべき学習項目の総体」(田中1991)である。シラバスを具体化したものが、教材および教科書である。

田中・斎藤(1993)は、シラバスのタイプには大きく分けて2種類あり、言語形式や機能などを中心

とした「言語的シラバス」と、トピックやテーマ場面などを中心とした「内容的シラバス」があるとしている。前者には、1) 構造シラバス、2) 機能シラバスがあり、後者には、1) 話題シラバス、2) 課題(タスク)シラバス、3) 場面シラバス、4) 技能シラバスがある、としている。

ここで、中級教科書のまとめとして、シラバスによる分類と、先のⅠ.～Ⅳ.の、文型に対する考え方(文型の提示の仕方)による分類を合わせて整理すると、次のようになる。ただし、技能シラバスによる教科書は、それぞれの技能を伸ばすために作成されており、文法・文型には重点が置かれていないため、取り上げなかった。従って、「内容的シラバス」のものは、中級教科書では1)の話題シラバスのものだけになる。

なお、教科書は、主要なもの、比較的新しいものについてできる限り拾った。大まかではあるが、ある程度、教科書の傾向が窺えると思う。

	文型の提示の仕方	
○内容的シラバス 1) 話題シラバス	Ⅱ	<i>Modern Japanese for University Students Part II</i> (1966) ,Part III (1968)、 <i>Integrated Spoken Japanese</i> (1971)、『日本語中級Ⅰ』東海大学 (1979)、 <i>Intensive Course in Japanese</i> (1980)、 <i>Standard Japanese</i> 英文標準日本語 (1987)、『日本語Ⅱ』(1987)、『総合日本語中級』(1987)、『総合日本語中級前期』(1989)、 <i>Communication Japanese Style Ⅲ</i> (1989)、『総合日本語初級から中級へ』(1990)、『日本語中級Ⅰ』国際交流基金 (1990)、『テーマ別中級から学ぶ日本語』(1991)、『中級日本語』(1994)、『文化中級日本語Ⅰ』(1994)、 <i>An Integrated Approach to Intermediate Japanese</i> 中級の日本語 (1994)、『日本語中級J301』(1995) など
○言語的シラバス 1) 構造シラバス	Ⅲ	<i>Intermediate Japanese</i> (1968) 『日本語初中級 理解から発話へ』(1995)
2) 機能シラバス ①コミュニケーション機能	Ⅱ	『現代日本語コース中級Ⅰ』(1988) Ⅱ (1990) <i>JAPANESE FOR YOU The Art of Communication</i> (1988)
②概念(notion)	Ⅳ	『日本語表現文型中級ⅠⅡ』(1983)

中級教科書は、初級教科書と違って、言語的シラバスのものが少なく、内容的シラバス、中でも話題シラバスのものが多いのが分かる。ただ、言語的シラバスか内容的シラバスか、が必ずしも明確でないものもあり(いかなる教科書もあるシラバスを採用したからといって、他のシラバスの視点を無視する

わけではないので)、ここでは、シラバス提示の順序として何が最も優先されているか、によって分類した。

たとえば、Communication Japanese Style Ⅲは、いわゆる文型あるいは文法項目（「表現文型」と呼んでいる）に加えて「表現意図」「企図的表現」（会話のストラテジー）の視点も取り入れている。

また、『文化中級日本語Ⅰ』は話題シラバスによるものであるが、各課に「接続詞」「副詞」の場所を別に設けて、学習者の注意を引き付ける工夫がある。ただし、その課に出てきたものを取り出して並べているだけで、体系性はない。

次に、言語的シラバスによる教科書を見てみよう。

2) の機能シラバスは、「機能」の意味するところで、さらに2つに分けた。①「コミュニケーション上（会話）の機能」、たとえば「誘う」言い方、「依頼」「断わり」の言い方などの表現を中心にしたものと、②時の表現、原因・理由の表現などの、文の有する「概念（notion）」とである<sup>4</sup>。

2) ①の「コミュニケーション機能によるシラバス」の教科書では、会話あるいは実際の言語行動において、どのように言語を使用するか、といった見方が反映されている。

なお、これら2種類の教科書について、「文型」の観点からの分類でⅡとしたのは次の理由による。「会話」の部分においては、その課の会話機能を担う表現が掲げられているが、「文法」の部分においては、その課に出てきた文法項目が取り上げられているだけである。

一方、1) の構造シラバスは、筆者の調べた限り、Intermediate Japanese および『日本語初中級 理解から発話へ』だけであった。前者は、文の種類および文法カテゴリーによってまとめられたものであり、後者は、その書名が示すとおり、初級で導入された文法項目の中から、中級に進む前に確認しておくべきとする26項目を、各項目ごとに整理しているものである。

「わがこと・ひとごと」の観点は、構造シラバスに属するものである。

### 3. なぜ「わがこと・ひとごと」か？

#### 3. 1 『日本語表現文型』

筆者は、筑波大学留学生センター補講コースにおいて、1989年秋期コースから『表現文型』を使用し、中級レベルの文法の授業を実施してきた。

佐久間（1986）によると、『表現文型』の作成意図は、「一般的な日本語の表現類型を能率よく身に付けさせるための」中級教材を提供することにある。また、前節で見たように、『表現文型』は、「機能（概念）シラバス」による教科書で、野田（1986）の分類ではⅣにあたる。初級段階における文型（「構造文型」）積み上げ式で、それぞれはばらばらに提出されてきた文法項目が、『表現意図』の観点からくみなおされ整理されるので、分かりやすい。しかし、その一方で、中級段階で注意を払わなければならない、『表現意図』とは異なる軸とでも言うべき対立原理の必要を感じた。

たとえば、様態を表す助動詞「そうだ」は、初級段階において、次のような用例で教えられることが多い。その際に、絵が付けられていることも多く、学習者にとっては、これら（1）（2）の文を理解することは難しくない。（『表現文型』では第17課「予想・予感・徴候」の中にある。）

- (1) 雨が降りそうです。
- (2) このケーキはおいしそうです。

しかし、(1) (2) が同じ「～そうです」という形をとりながら、その意味するところに違いがあるというところまでは、あまりよく理解されていない。従って、学習者は(3) (4) のような文をよく作ってしまう。

- (3) 私はもうすぐ帰りそうです。
- (4) 田中さんはうれしいです。

中級において、「そうだ」を「らしい」「ようだ」と比較することはあっても、(5) (6) における a. b. の対立で提示されることはあまりないようだ。

- (5) a. 私はうれしいです。  
b. 田中さんはうれしそうです。
- (6) a. 私はもうすぐ帰れそうです。  
b. 田中さんはもうすぐ帰りそうです。

また、(6) a. における可能形の使用(「帰れそう」)は、その他の表現においても共通する問題である。たとえば、『表現文型』第9課「希望・願望」の【文型・文法】に、次のような表現がある。

- (7) VI. ①早く試験が終わらないかなあ。  
④あの人に会えないかなあ。
- (8) VII. ①早く試験が終わるといいなあ。  
③あの人に会えるといいなあ。

これらは、事態の実現を願望する表現であり、願望の主体は話し手である。事態の実現が、話し手自身のことについての実現である場合、動詞の可能形を使わなければならない。学習者はVI. ④を「あの人に会わないかなあ」、VII. ③を「あの人に会うといいなあ」とする間違いをおかしやすい。

『表現文型』は、「表現意図」の観点から文法の整理をしているものなので、挙げられている例文中には(5)～(8)の用例が入っているものの、下線部の感情の持ち主あるいは動作主が話し手なのか他人なのか、に注意が向くように、対立的に並べて提示されているわけではない。

そこで、「私(話し手)」「他の人」の対立を前面に出すものとして、「わがこと・ひとごと」を軸とした教材を作成することになった。

### 3. 2 「わがこと・ひとごと」の観点

渡辺(1991)は、日本語では、話し手が文を発する際に、話し手自身のこと(「わがこと」と把握するか、話し手に関わりなく成立すること(「ひとごと」と把握するか、を表現する水準があるとしている。

たとえば、次のような感情形容詞は、話し手(私)について述べることはできても、他人(彼)について述べることはできない。それは、「嬉しい」のような感情形容詞は「わがこと」性を有するからであり、一方、助動詞「そうだ」は「ひとごと」性を有するため、「私」とは共起できないとしている。

- (9) ○ 私は嬉しい。  
 (10) \* 彼は嬉しい。  
 (11) \* 私は嬉しそうだ。  
 (12) ○ 彼は嬉しそうだ。

そして、文を「ひとごと」化する「そうだ」と対蹠的な働きをするのが、「わがこと」性の「たい」であるとし、この二つが助動詞の体系の中において、西洋諸言語における「人称」に対応するのではないか、という説を展開している。しかし、この「わがこと・ひとごと」の観点は、「人称」表現と切り離すことで、拡げて論ずれば、様々な領域への展開が可能だとしている。

#### 4. 教材の開発

##### 4. 1 1994年春期コース文型・文法Ⅱ

第1節で述べたように、文法クラスを担当してきて、『表現文型』にかわる、中級の文法を教えるのに良い教科書を探していたが、見つからなかった。そこで、1994年春期コースの文型・文法Ⅱを担当する3人の教師で、とにかく教科書を変えてみようということになり、『テーマ別中級から学ぶ日本語』を使用することにした。しかし、これは話題シラバスによる教科書なので、一方で、文法力を養成するために「構造シラバス」を取り入れる必要があることから、週3コマのうち1コマを、そのための別の教材を作成してクラスを運営することになった。

このような経緯で、筆者は1994年春期文型・文法Ⅱの週1コマを、「わがこと・ひとごと」の観点から教材作成を試み、授業を行った。ただし、週2コマで行われる教科書との関連を持たせる必要、文の構造を復習させる必要、そして何よりも週1コマという時間的制約があって、「わがこと・ひとごと」という大きい問題の一部しか盛り込めていない。以下に取り上げた項目を記す。

- |                   |   |
|-------------------|---|
| 1. 連用と連体 (1)      | <文の構造、連用修飾と連体修飾による文の拡大、<br>「N <sub>1</sub> のN <sub>2</sub> 」> |
| 2. 連用と連体 (2)      | <複合助詞の連用と連体<br>「～ための/ために」、 「～による/によって」 など>                    |
| 3. 連用と連体 (3)      | <「～ような/に/で」、 「～ように思う/言う/見える」>                                 |
| 4. 主体 (1)         | <「は」と「が」の係り方、従属節内の「が」>  |
| 5. 主体 (2)         | <受身、使役、使役受身、授受表現>   |
| 6. 主体 (3)         | <授受表現と間接受身>   |
| 7. 主体 (4)         | <話者への方向性「～てくる」>   |
| 8. 主体 (5)         | <内面 (感情、意志) の表現>  |
| 9. 話者の気持ちを表す (1)  | <取り立て助詞① 導入、「は、も、ばかり、まで、さえ、<br>など (なんか)」>                     |
| 10. 話者の気持ちを表す (2) | <取り立て助詞② 「は」>   |

11. 話者の気持ちを表す (3) <取り立て助詞③  
「も、さえ(すら)、まで、ほど、くらい」>
12. 話者の気持ちを表す (4) <陳述副詞と情態副詞>
13. 話者の気持ちを表す (5) <「～てしまう」など、過去の時を表す「～たら/～と」>

#### 4. 2 中級教材の内容

教材の内容を全部のせる紙幅もないので、「わがこと・ひとごと」の観点をどのように生かしたか、次の2点について具体的に見ることにする。

- 1) 話し手への方向性、および話し手の「客観的事実」の描き方
- 2) 内面の表現

##### 4. 2. 1 話し手への方向性、および話し手の「客観的事実」の描き方

日本語は基本的に、「<私が>他の人に対して行う動作」と「他の人が<私に>対して行う動作」は、全く同じ動作であっても、同じ述語表現を使えない言語である。その代表が「あげる・くれる」である。この授受動詞の難しさは、外国語では「誰が誰にあげようが「あげる」」であるのに対し、日本語では、「あげる」動作が「私(話し手)」に向かうときは、「くれる」を使うという点にある。

英語と韓国語を見てみよう。日本語に文法がよく似ていると言われる韓国語でも、「あげる」は変わらない(16)。

(13) I give you a present.

私<sub>が</sub>あげるあなたに プレゼントを

(14) Naega tangsinege seonmuluel cunda. <sup>(4)</sup>

私<sub>が</sub> あなたに プレゼントを あげる

(15) You give me a present.

あなたがあげる 私に プレゼントを  
(くれる)

(16) Tangsini naege seonmuluel cunda.

あなたが 私に プレゼントをあげる  
(くれる)

これは、初級段階で学習する重要文法項目であるが、中級では、この「あげる・くれる」の対立を、「<私が>他の人に対して行う動作」対「他の人が<私に>対して行う動作」という、より大きい概念の中で捉えさせる必要がある。そうすることによって、初級段階ではばらばらに学習した、授受表現、「テクル」、受身表現がつながりを持って、学習者の頭の中で整理される、と考える。

実際の教材の一部を見てみよう。中級なので、学習者は初級課程で得た知識を持っている。教材は、はじめに、その知識を使って何らかの課題に答えることで、問題意識を高めるように作成してある。そし

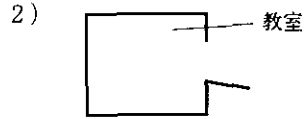


て、授業の中で、学習者がノートを完成させていく、という形態をとっている。

【導入と説明】

1. 質問：「私」はどこにいますか。

- 1) 男の子が電車に乗った。
- 2) 犬が教室に入ってきた。

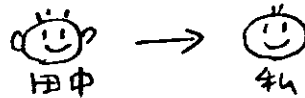


2. 絵を見て、\_\_\_\_\_に書きなさい。

a.



b.



- 1) a. 私は田中さんにプレゼントをあげた。
- b. 田中さんは私にプレゼントを\_\_\_\_\_。

- 2) a. 私は田中さんに荷物を送った。
- b. ×田中さんが私に荷物を送った。
  - 送ってくれた。
  - 送ってきた。
  - 送ってきてくれた。

3)



- a. ×田中さんが私に電話をかけた。
  - かけてくれた。
  - かけてきた。
  - かけてきてくれた。
- b. ○田中さんから電話が かかってきた。

学習者は「きのう母が私に電話しました」という間違いをよくおかす。

これらの表現は、客観的事実・事態を、話し手がどのように描きたいかを表すものであり、中級段階で学習されるべきことである。

#### 4. 2. 2 内面の表現

我々は自分自身の内面しか分からないものであるが、言語表現上、たとえば英語では、他人の内面を「わがこと」のように表現できるのに対し、日本語では自分の内面についてしか表現することができない。このことを押さえると同時に、「他の人」の内面を表現するときには、「ようだ」「そうだ」「らしい」等の助動詞をつけるということを学習すべきである。「ようだ」「そうだ」「らしい」等について、その用法の違いよりもむしろ、「他の人」の内面を表現する「私」の考えを表す点で、同じであるということ、ここで教える必要があると考える。

(17) He is sad.

(18) ×彼は悲しい。

(19) ○彼は悲しそうだ。

(20) He thinks he is going to buy a car.


(21) ×彼は車を買おうと思う。


(22) ○彼は車を買おうと思っている (そうだ/ようだ/らしい、等)。

実際の教材を一部見てみよう。


#### 【導入と説明】


I.  は誰ですか。また ( ) には助詞を入れなさい。


1.  は) とても悲しい。


2.  は) 足がいたい。


3.  は) 車 ( ) ほしい。

4.  は) 車 ( ) 買いたい。

5.  は) 車を買う。

6.  は) 車を買うと思う。

7.  は) 車を買おうと思う。

8.  は) 車を買おうと思っているようだ。

II. \_\_\_\_\_ に書きなさい。

a. 私は車を買う。

b. 彼は車を買う {  
    { そうだ。  
    { らしい。  
    { ようだ。  
    { みたいだ。

c. 円は安くなる \_\_\_\_\_。

## 5. 今後の課題

今回紹介した教材は、週1コマという時間的制約もあって、「わがこと・ひとごと」を軸とした文法教材といっても、ごく一部でしかない。シラバスデザインは、学習者のニーズ分析およびレディネス分析をもとに行われる。授業を行いながらの作成であったため、それらにひっぱられてしまったところもある。「わがこと・ひとごと」の観点で取り上げるべき文法項目には他に、話し手の推量・判断を表す助動詞、および終助詞があり、それらは当然教材に含まなければならない。

一方で、「わがこと・ひとごと」の観点からは整理できないが、中級で取り上げるべき文法項目がある。命題あるいはコトと呼ばれる、客観的事実を表す部分を構成する項目、および複文における従属節である。

「わがこと・ひとごと」の観点は、1つの軸であり、教科書は多元の軸が組み合わさって、築かれるものであろう。しかし、主軸として、文を述べる「私」の位置を意識化させることは、中級段階の文法教育において大切だと考える。その上で、「表現意図(概念)」および、従属節など、他の軸を組み合わせ、その全体像を構成する文法シラバスを作成する必要がある。

言語能力とは、統合的なものであり、学習者の学習目的および目標にもよるが、4技能のバランスがとれていることが望ましい。従って、中級段階の日本語力の養成を考えると、4技能それぞれにおいて、その技能を養成するのに最適なアプローチは当然異なったものとなってくるであろう。そして、技能の中に含まれる文法の形態もある。本稿で提案した、「わがこと・ひとごと」を軸とした教材は、それら技能別のクラスと並行して行われるべき「文法のまとめ」のクラスでの使用を考えている。第1節でも述べたが、中級においては特に、文法を体系的に提示し、教授していかねばならないと考える。

1995年春期コースからは、文型・文法Ⅱにおいて週3コマを使い、「わがこと・ひとごと」の観点でシラバスデザインを行いつつあるが<sup>9)</sup>、上述した問題点を考慮し、「わがこと・ひとごと」を主軸とし、他の軸を組み合わせた文法シラバス作成が課題である。

## 注

- (1) 「中級」というのは、日本語教育機関によっても差があるが、目安として、約300時間の学習（初級文法項目、約400～500字の漢字、約1200語の語彙）が終わった段階（北條1979）、あるいは日本語能力試験3級が出題基準としている、初級課程修了時における学習到達度とする。
- (2) 筑波大学留学生センターの補講コースでは、現在、中級以上のクラスにおいて、文法のクラスを中心に、技能別のクラスが設けられている。

筆者が『表現文型』のクラスを担当し始めた1989年は、現在とは、制度がまったく異なっており、各クラスの名称も違うが、『表現文型Ⅱ』が一番上のクラスで教えられていたもので、現在のクラスで言えば、文型・文法Ⅲに当たる。

文法クラス	レベル	技能別クラス				
文型・文法Ⅰ	中級前期	聴解Ⅰ	会話Ⅰ	読解Ⅰ	作文Ⅰ	漢字Ⅰ
文型・文法Ⅱ	中級後期	聴解Ⅱ	会話Ⅱ	読解Ⅱ	作文Ⅱ	漢字Ⅱ
文型・文法Ⅲ	上級前期	聴解Ⅲ	会話Ⅲ	読解Ⅲ	作文Ⅲ	漢字Ⅲ

なお、文型・文法クラスはとることが義務づけられ、技能別クラスは取捨選択できることになっている。クラスのレベルは、プレースメントテストの結果によって別々に決定されるので、文型・文法、技能別の各クラスがすべて同じレベルになるとは限らない。

- (3) 『表現文型』は概念によるシラバスの教科書であるが、一部、「依頼」「申し出」といった「コミュニケーション機能」も混ざっている。また、佐久間（1986）は、この教科書が未完成のものであり、「表現意図」による項目は21課までになっているが、あとこの2倍ほどの項目が足されて全体がそろろうと述べている。
- (4) ハングルローマ字表記法に従って記した。
- (5) 筑波大学留学生センターの市川保子氏と共同で開発中である。

## 【教科書】

アメリカ・カナダ十一大学連合日本研究センター【Integrated Spoken Japanese】

大阪外国語大学【Intermediate Japanese】

大曾美恵子・小山揚子【JAPANESE FOR YOU The Art of Communication 英文実用日本語】大修館書店

言語文化研究所附属東京日本語学校【Communication Japanese Style Ⅲ】

国際学友会日本語学校【日本語Ⅱ】

国際基督教大学【Modern Japanese for University Students Part Ⅱ・Ⅲ】

国際交流基金日本語国際センター【日本語中級Ⅰ】

曾我松男・小山揚子・大曾美恵子『Standard Japanese 英文標準日本語』大修館書店  
 筑波大学日本語教育研究会『日本語表現文型』  
 東海大学留学生教育センター『日本語中級Ⅰ』  
 東京外国語大学留学生『中級日本語』  
 土岐哲 他『日本語中級Ⅱ 301』(1995) スリーエーネットワーク  
 三浦昭・マクロイン花岡直美『An Integrated Approach to Intermediate Japanese』The Japan Times  
 水谷信子『総合日本語初級から中級へ』凡人社  
 水谷信子『総合日本語中級前期』凡人社  
 水谷信子『総合日本語中級』凡人社  
 松田浩志他『テーマ別中級から学ぶ日本語』研究社  
 文化外国語専門学校『文化中級日本語Ⅰ』凡人社  
 名古屋大学総合言語センター日本語科『現代日本語コース中級ⅠⅡ』名古屋大学出版会  
 名古屋YWCA教材作成グループ『日本語初中級 理解から発話へ』スリーエーネットワーク  
 ランゲージサービス『Intensive Course in Japanese Intermediate』

#### 参考文献

1. 市川保子（1995）「技能別クラスにおける文法シラバス・リスト作成の一試案」  
『筑波大学留学生センター日本語教育論集』10：1-18
2. 菊地康人（1994）「日本語教科書の作成と言語学—あわせて、動詞の活用のとりあげ方について—」  
『東京大学留学生センター紀要』4：17-40
3. 国際交流基金編（1983）『日本語教科書ガイド』北星堂書店
4. 佐久間まゆみ（1986）「『日本語表現文型』の諸問題」『日本語教育』59：115-125
5. 田中望（1988）「日本語教育の方法—コース・デザインの実際—」大修館書店
6. 田中望（1989）「コースデザイン」『講座 日本語と日本語教育』第13巻 明治書院
7. 田中望・斎藤里美（1993）「日本語教育の理論と実際—学習支援システムの開発—」大修館書店
8. 寺村秀夫（1989）「構造文型と表現文型」『講座 日本語と日本語教育』第13巻 明治書院
9. 日本語教育学会編（1991）『日本語教育機関におけるコース・デザイン』凡人社
10. 野田尚史（1986）「日本語教科書における文型の扱い」『日本語教育』59：48-61
11. 野田尚史（1989）「文構成」『講座 日本語と日本語教育』第1巻 明治書院
12. 渡辺実（1991）「『わがこと・ひとごと』の観点と文法論」『国語学』165：1-14